

ふるさと再発見シリーズ4

アヨロの大地



目 次

はじめに	1
1 虎杖浜、アヨロ地区の概要	2
2 数々の伝説	5
3 豊富なアイヌ語地名	8
4 白老町のアイヌ語地名調査記録	11
5 アヨロを記した『東蝦夷日誌』	12
6 アヨロ遺跡出土の装身具等	13

トピックス1 明治 40 年代、越後の漁業移住者が拓く	4
トピックス2 この世とあの世をつなぐ洞窟	5
トピックス3 倶多楽湖の養殖事業	10

はじめに

郷土史家の故高田寅雄氏は、遺稿集『ふるさとアヨロ』のなかで、「地名は無形文化財」であり、「急テンポで進む開発の波に、かつての湿地、丘陵、湖沼など地名に相当で無くなった所も多い。しかし、河川はいかに改修されようと、その呼び名はアイヌ語を残している」と記しています。

このように道内の地名の多くは、アイヌ語に基づいているといわれていますが、古い記録を紐解くと、より細やかなアイヌ文化が豊かに用いられていたことがわかります。そして、実際に土地を歩き、地形や景色を体感することで、アイヌ語地名が息づいていた時代が想像できます。

本誌を通して、虎杖浜、アヨロ地区への理解が深められ、アイヌ語地名や伝説に関心を抱いていただければ幸いです。



1 虎杖浜、アヨロ地区の概要

苫小牧市から室蘭市まで、ほぼ一直線に延びた海岸線は、白老町虎杖浜と登別市の間で大きく様相を変える。

他では穏やかな砂浜が続くのに対して、虎杖浜周辺では切り立った断崖や丘陵が波打ち際まで突出して、複雑な地形を形成している。その断崖の上に立つと、天候の良い日には遥か渡島半島の先端（恵山岬）から襟裳岬まで望むことができる。

この複雑な地形の上では、大昔から人々の生活が営まれていた。特にアイヌ民族にとって重要な生活の場であつたらしく、海岸線に沿ってたくさんの遺跡や地名が残されている。

虎杖浜地区は、明治40年代に新潟県北蒲原郡紫雲寺町や聖籠町から移住した漁民らにより拓かれ、現在は59もの豊富な源泉をもつ虎杖浜温泉をはじめ、虎杖浜たらこ・虎杖浜昆布などの名産品もあり、白老町西端の漁業のまちとして、四季を通じて交流人口の多い地域となっている。



アイヌ語地名と伝説が息づくアヨロの大地



(1) 伏古別川

白老町と登別市を分けているのは、登別漁港に流れ込む“伏古別川”という小さな川で、“シラオイウクル＝白老の人”と“ヌプルペトゥウクル＝登別の人”の生活圏を分ける川であった。

フシコベツは北海道の至るところにある地名である。“フシコ・ベツ＝古い・川”という意味で、多くは川の流れが変わったときに、かつて流れていた方の川に付けられるものだが、流れが穏やかで古くなったように見える川などにも付けられた。

(2) アヨロ川

江戸時代、白老場所の西端にあったのがアヨロ場所である。現在は虎杖浜となっているが、この名前は少し東側にある「クッタラウシ」から付けられた。その意味は「クッタラウシ＝クッタラ・ウシ＝イタドリの・多い・ところ」である。ただし、クッタラウシがどこに付けられた地名なのかはわかっていない。

地名の最後に付く「イ」という音は、場所を指すこともあれば、川を指すこともあるので、現在のクッタリウス川に付けられていた地名であることも否定できない。アヨロは「ウヨロ」や「オヨロ」と同じように、意味がわかっていない地名である。

(3) ポンアヨロ川

アヨロに対して小さい方のアヨロなので「ポン=小さい・アヨロ」という名前が付いたようだ。

ただし、今のアヨロという地名が、元はこのポンアヨロに付いていた地名で、その地名が今の虎杖浜へ移ったので、ポンアヨロと呼ばれるようになったとも考えられる。



昭和初期のポンアヨロ。虎杖浜地区の本格的な開拓は、新潟県からの漁業移住により始まった

トピックス1

明治40年代、越後の漁業移住者が拓く

明治42(1909)年頃からポンアヨロに移住した人たちは、新潟県藤塚浜、次第浜を主力に網代浜、太代浜、島見浜など北蒲原郡の下越後出身者である。

定住は、明治28(1895)年、当時無人のポンアヨロに居を構えた宮森太惣八が最初で、これより地縁血縁を頼りに増加した。昭和11(1936)年の虎杖浜地区の戸数は、クッタリウス27、アヨロ158、ポンアヨロ35の計220戸、人口は1,271人で、このうちの70%は越後衆であったという。また、本間、渡辺、須貝、吉田、宮森、高橋、松田など同姓が多く、屋号で呼ぶのが習わしであった。

新潟県人は働き過ぎるのか自主独立の精神が旺盛なのか、「越後衆の歩いた跡には草も生えない」と揶揄されたほどであった。

(1) あの世へ通じる入口「アフルパロ」

「アフルパロ＝入口＝あの世への入り口」という意味である。登別漁港の東側にある岩穴で、白老ではこんな伝承が残されている。

「その昔、つれ合いを亡くしたおじいさんが、ある日、昆布を拾うために朝早く浜辺へ行ったところ、見覚えのあるおばあさんが昆布を拾っていたので近づいてみると、それは亡くなったはずの自分の妻であった。声をかけようとしたところ、そのおばあさんは浜辺にある大きな岩穴の中に入って行った。おじいさんは追いかけてやろうとしたが、穴はすぐに行き止まりになっていて、入ることができなかった。人間は入ることができないのに、亡くなった人は出入りできるのを見て、この穴があのだとわかったそうだ。」

実際には奥行きが3～4メートルしかない岩屋で、20年程前から砂が溜まるようになり、奥まで入ることはできなかったが、地元の有志が砂を取り除く作業を行うなど一部復元された。アイヌ文化では、何かあるといけないという理由で、ふだんは近づいてはいけない場所とされている。

アイヌ民族にとってアフルパロは、決して近寄ってはいけない場所だった。巨大な岩肌は、約7万年前から4万数千年前の倶多楽火山の噴出物層である



トピックス2

この世とあの世をつなぐ洞窟

アイヌ民族の世界では、人が死を迎えると肉体から霊が抜け出し、自分の住む集落(コタン)近くの洞窟を通して「あの世」に行くと考えられている。ときには亡くなった人が洞窟を通してこの世に現れることもあるという。

アイヌ語であの世はボクナモシリ、もしくはアヌンコタンと呼ばれ、この世と同じように山野が広がり川が流れるなか、人々はコタンを形成し日々の暮らしを送っている。ただ違うのは、季節や昼夜がこの世と逆転していること。また、あの世の1日は、この世の6日間に相当するという。あの世にいる祖先たちは、この世の子孫たちから供物が届くと、それを囲み親戚縁者を招いて宴会を開く。だが、供物が届かない者は誰も家に招くことができず、肩身の狭い思いをするそうである。

(2) オキクルミの尻もち跡「オソロコツ」

その昔、「ユカラ（英雄が主人公として語られる物語）」に出てくる英雄のオキクルミが沖で大きなクジラを捕り、それを浜辺で、ヨモギで作った焼き串に刺して焼いていたところ、クジラがあまりにも大きいためになかなか焼けず、つい居眠りをしてしまった。そのうちにクジラはすっかり焼け、クジラを刺していた焼き串までもが焼けてしまい、クジラはドサッと地面に落ちた。その音に驚いたオキクルミは後に飛び退き、尻もちをついた。そのときにできた尻もちの跡が、今の“オソロコツ＝オソロ・コツ＝尻・跡”である。

昔は広い場所で民家3軒が建っていたが、現在は人も住まなくなり、波による浸食で狭くなっている。



ボンアヨロの主なアイヌ語地名

焼き串「イマニツ」

オソロコツと対になっている地名で、クジラを焼いた“イマニツ＝焼き串”のこと。かつてはアヨロの前浜にあった。焼き串とはいえ、海面から顔を出している大きな岩で、40～50年前まではそれらしく見えていたが、現在は波により浸食され、折れた焼き串には見えない。



壮大な英雄叙事詩が残る オソロコツ

(3) 胴体を切り取られたクジラ「フムペサバ」

“フムペ＝クジラ”にまつわる地名は、道内各地に残されている。クジラはアイヌ文化では貴重な食料で、特に流れ寄る“寄りクジラ”は安全に得ることができるご馳走であった。

登別漁港の西側にあった“フムペ・サバ＝クジラ・頭”は、他の地域にあるクジラにまつわる地名と少し違い、この“フムペサバ”には壮大な物語がある。

その内容は、「昔、この世界ができたころ、一頭の大きなクジラがいて、いつも頭と尻尾が、どちらが偉いか喧嘩をしていた。頭は、自分がいなければどこにも行けないのだから自分の方が偉いといい、尻尾は、自分がいなければ泳ぐこともできないのだから自分の方が偉いといった。この喧嘩は絶えることがなく、あるときそれに業を煮やした“コタンカラカムイ＝国造りの神”が怒り、そんなに喧嘩ばかりしているのなら喧嘩をできないようにしてやるといって、頭と尻尾を切り分け、お互いが見えないように、大きな山（クツタルシヌプリ：窟太郎山）を間に置いた。それが今の“フムペサバ”で、尻尾は知床になった。」というものである。

かつてはクジラの頭のような形をしていた“フムペサバ”は、岩の採取で削られ、今となっては、なぜ“クジラの頭”という名前になったのかも、わからない形になっている。また、尻尾は山となり、“町民の里山”萩の里自然公園として利用されている。



縄文時代早期から連続と歴史を紡いできたアヨロの大地。左下の台地がフムペサバ

3 豊富なアイヌ語地名

(1) カムイミンタラ～神々が遊ぶ庭～

松浦武四郎の『蝦夷日誌』のなかに、「カムヘシツタ 大岩畳重るよし」という記述があるが、これ以外の古い文献には見当たらず、「カムイミンタラ＝神・庭」を記録した唯一のものではないかと思われる。この記録から推察すると“カムイミンタラ”は海岸あたりの大きな岩だったと思われるが、それがどこなのかを特定することはできていない。現在は、ポンアヨロ川河口右岸の高台に広がる平らな場所とされているが、どちらが正しいのかはわからない。

“カムイミンタラ”とは、神の世界から神々が降り立ち、盛んに宴を開き、舞を舞って興じる場所とされ、そのため余計な植物が生えておらず、単一の種類の短い植物だけが一面に生えていると言いつたされている。多くは山の上などにある。



チャシも構築された カムイミンタラ

(2) カムイエカシチャシ～後に付けられた造語～

ポンアヨロ川の河口左岸の高台にあったアヨロ鼻灯台（昭和51(1976)～平成28(2016)年）は、遥か遠くからもその光を見ることができ、多くの船の航海の安全を見守っていた。

灯台の光が遠くからも見えるということは、その高台からも遠くが見渡せるということで、そのため、この高台はチャシとしても使われていた。チャシがどのような目的で築かれたのかは定かではないが、このチャシが果たした役割のなかに、海の監視があったことは容易に想像がつく。

アイヌ文化では、チャシに固有名詞が付くことはほとんどなく、各地のチャシに名前が付けられたのは、文化財として把握しやすくするためである。



活用が期待されている灯台跡地



槍先などの鉄製品も見つかった カムイエカシチャシ

この“カムイ・エカシ・チャシ=神・翁・チャシ”も、灯台を建てる際に発掘調査が行われ、その折に“カムイエカシ”の伝承を元に付けられた名前である。

(3) ヤウungkットマリ～地元の人々の碇泊所～

“ヤウungkットマリ”はポンアヨロに付けられていた地名である。その意味は“ヤウungkット・マリ=地元の人・船着場”で、そこに住む人々が船を揚げておく場所であった。ポンアヨロ川の河口は両側を岩礁で囲まれ小さな入江のようになっているので、船を揚げるには都合がよいため、このような地名が付いた。



比較的波穏やかな入江にある ヤウungkットマリ

(4) レプungkットマリ～外地人の碇泊所～

ヤウungkットマリに対して、沖から来る人(地元の人ではない者)には、沖の岩礁に船を着けさせた。それが“レプungkット・マリ=沖の人・船着場”である。ポンアヨロの前浜、海へ向かって右側の岩礁が“レプungkットマリ”だとされているが、波の穏やかな時でさえ、船を着けるのは大変そうな場所である。



船礁などの疫病対策もあった レプungkットマリ

(5) クッタラ湖～伝承宿る神

現在、倶多楽湖と呼ばれるこの湖は、アイヌ文化では“カムイト”と呼ばれていた。

“カムイ・ト＝神・湖”は、山の奥などにあって近づきにくい湖などに付けられる名前で、日本文化では「神秘的」と表現されるような湖のことである。



日本で一番丸い湖 倶多楽湖

近年になって付けられた“倶多楽湖”という名前は、虎杖浜の語源ともなっている“クツタルシ＝オオイタドリの多いところ”から付けられたものである。

道東の摩周湖と全国1位、2位の透明度を競う倶多楽湖は、水深148m、周囲8kmの円形のカルデラ湖で、4万年前までの噴火で湖が形成された。雷鳴が激しく轟くと「クツタルシトから雷神が昇天する音だ」などと、雷神の棲む沼との伝承もある。

トピックス3

倶多楽湖の養殖事業

道庁立小樽水産学校（現北海道小樽水産高校）校長を退職した中尾節蔵（後に北大講師）と妻トメは、明治末から大正の終わりころにかけて、この湖でヒメマス（ヒメマス）の養殖に挑戦した。明治42（1909）年に十和田湖から、44年には支笏湖からヒメマスを購入し放流した。

大正10（1921）年には体長75cm、幅24cm、重さ4.5kgにも及ぶものもあり、この頃までは漁獲が豊富であったとの記録が残る。後年にはニジマスも孵化放流した。

(6) カムイワッカ

国道36号線を登別温泉に向かって上がっていくと、中登別の辺りの右側に泉がある。松浦武四郎は『東蝦夷日誌』のなかで「カモイワツカ周四間清水也とて冷水噴出また冬日には温き由也其底白砂を噴上すぐに一筋の流れに成名義神水の義也」と記している。語源は武四郎も書いているように、“カムイ・ワッカ＝神・水”である。

4 白老町のアイヌ語地名調査記録

東北・北海道地方のアイヌ語地名を調査した山田秀三（明治32(1899)年～平成4(1992)年）は、東京帝国大学法学部を経て農商務省、商工省等に勤務し、昭和20(1945)年退官。24(1949)年から北海道曹達株式会社社長、相談役などを歴任した。

16(1941)年に着任した仙台鉱山監督局長時代に東北地方の地名に関心を持ち、戦後から重点的に東北と北海道のアイヌ語地名を詳しく調べた。

金田一京助の薫陶を受け、また、知里真志保、久保寺逸彦らと交流を持ち、既存の文献や地図を徹底的に調べ、そのうえで現地を確認していくという実証的な研究方法を確立し、アイヌ語地名研究の水準と蓄積を大きく前進させた。



昭和59(1984)年「白老町のアイヌ語地名」「白老町アイヌ語地名調査記録」より

松浦武四郎（文化15(1818)年～明治21(1888)年）は、ロシアとの国境問題で揺れた幕末期の蝦夷地を、憂北の志士として3回、幕府の御雇として3回、計6回踏査し、アイヌ民族の文化や生活実態などを克明に記録した。維新时期には、当代随一の蝦夷地通として新政府の北方政策に関わり、蝦夷地の北海道への改称、国郡の設定などに携った。また、幅広い交友関係を築き、黒船来航問題や世相などに関する情報通、古物蒐集家としても知られるなど、旅に生きた多彩で気骨、情熱の人であった。

白老には通算4度来訪しており、『東蝦夷日誌』を記した安政4年には、当時、仙台藩白老元陣屋の御備頭であった三好監物（文化11(1814)年～明治元(1868)年）と親しく対面している。

「ホロベツ領」（関係箇所のみ引用）

カモイワツカ ハアナウサンケナイ（右小川）、トレフケナシ（右山）、廿餘丁にしてカモイワツカ（周四間、清水也）とて冷水噴出、また冬比は温き由也。其底白砂を噴上、すぐに一筋の流れに成。名義、神水の義也。其邊り緑樹陰森、冷風を催し、

山路来て息もつきあへぬ旅人に めぐみ給ふる神の井の水

三伏の暑に此處に一睡をと思はる。予此處に小社をと思ひ、翌日ワスベツにて岩井某に此事を謀りたり。此岩井氏は武州大宮の社司なれば、恐らく他日氷川明神を立給ひしやらん。扱従ニ神水一少し（七八丁）白老道有、合ふて九折に上り、峠より俯ば縦別・白老欣然として掌を指が如し。又旅人の多く来りければ、

山かげに今や清水をかひつらん 群くる駒のいさましくみゆ

下る事十五六丁、七曲坂、兩方雑木接し枝、頗る險地なり。此道成功未レ日が故、處々崩たり。下り川端、崖下岩角を勿越飛越ヘナウサンケウシベツ（右小川）過、崖岩平、清水滴る處、是を霏石と云。山愈せまり、樹垂水怒りて小暗き處、是を地獄坂と云。是皆石場君の號られしと。岩坂切通し少し下りて温泉場、今は止宿所も出来、湯治人も居たり。筵を河中に敷て浴せしが、今は川の上に屋根を架、二川合て程よき湯にして入る也。硫黄にして臭氣甚し。又岩間より先年は五六尺も噴上る處と、二尺計上る處とニヶ所有しが、當時はなく成、其頃観音薬師の小堂有しが、是も見へず成ぬ。其土地も餘り開くれば、其水勢薬功も薄らぎたるやに思はる。源又ブルベツ岳（高山、後ろヲサルベツに至）より落る。（後略）

「白老領」（関係箇所のみ引用）

アエウロ 境より（六丁廿間）アエウロ（小川、海岸出岬）名義はアイヲロにて、アイとは矢の事、ヲロは納め、または入るの意也。矢を納むと譯す。土人往來の時、爰にて矢を放ち神に捧る義也（昆布場）。ヲショロコツ（砂地）同名處に多し（十餘丁）

○往來は海岸より少く上小坂有。是を越てヲモンベツの晝所へ下るなり。

エマニシ岬、箸所といふ義。廻りてヲモンベ（小川）、陸地と爰にて逢ふ（晝休所、漁や、夷人小や）。名義、時化の時に川口が閉ると云義也。

△川筋にヒシクシナイ（右小川）過て二股、右ホロナイ（源又ブルベツ岳）、左りホンヲモンベツ、其源クツタルシ岳。虎杖多きとの義也。巔に沼有（周五六丁）。是に水留りて何所へ落るか知れざれども、按に神水に出る也と思ふ。久摺領摩周湖の水は潜てニシベツに出る同利也。彼は凡五里、是は一里半に不レ足、怪しとする事なし。（後略）

6 アヨロ遺跡出土の装身具等（町指定有形文化財）

昭和53(1978)年、約2,000年前の続縄文時代前半期“恵山文化期の墓”アヨロ遺跡から、3軒の住居跡と65基の墓が発見され、そのなかから110個を超える完形土器やおびただしい数の土器片、石器とともに、コハクの玉などの装身具が多数出土した。

ひとつの墓からまとめて出土したコハク製平石は、全部で1,376個あり、玉の大きさはいずれも径が6～10mm、厚さが2～5mmに揃えられ、真ん中に小さな穴が開けられていることから、ネックレスとして使用されたことが想像され、また、一緒に見つかった管玉とメノウ製の「人」字形に加工された石製品は、ペンダントとして用いられたと思われる。他の64基の墓からは、このような大量の装身具は見つからなかったことから、これらと一緒に葬られた人物は、何か特別な役割か地位にあったものと推測される。

さらに、同時代に北海道南西部で盛んに用いられた「恵山式」と呼ばれる110を超える土器が、ほぼ完全な形で多くの墓から出土した。これらの土器は、鉢、甕、壺、椀など大小とりまぜてたくさんの形に分けられる。また、基本的な文様構成は、斜めあるいは縦方向に細い縄を転がし縄文をつけた後、口近くに棒状のもので何本もの沈線を引いたもので、かつ、沈線の間は縄文が摩り消されていることが多く、それまでまとまった報告例がなかった恵山式土器の究明は、本遺跡の調査によってはじめてその全容が明らかにされた。



恵山文化研究史に大きな示唆を与えた アヨロ遺跡出土の恵山式土器、コハク製平玉



『東西蝦夷地山川地理取調図 五』安政 6 (1859) 年 松浦武四郎

- 参考文献 『北方文化研究報告』13 1958 北海道大学
 『カムイエカシチャシ』 1977 白老町教育委員会
 『アヨロ 恵山文化の墓』 1980 白老町教育委員会
 『新版蝦夷日誌 (上)』1984 吉田常吉
 『新白老町史』 1993 白老町
 『白老町の文化財ガイドブック』 2001 白老町教育委員会
 『ふるさとアヨロ』 2004 高田寅雄遺稿集編集委員会
 『アイヌ語地名を歩くー山田秀三の地名研究からー』
 2007 北海道立アイヌ民族文化研究センター
 『白老アイヌ語地名マップ』 2010 (一社)白老観光協会

書籍名 ふるさと再発見シリーズ4「アヨロの大地」
 発行年月 令和2 (2020) 年3月
 写真提供 高橋淳一 (虎杖浜)
 瀧谷栄 (ドローンde街おこしプロジェクト主宰)
 北海道博物館 函館市中央図書館
 協力 岡田路明 (苫小牧駒澤大学客員教授)
 白老地域文化研究会 仙台藩白老元陣屋資料館友の会
 発行 仙台藩白老元陣屋資料館
 TEL&FAX:0144-85-2666 E-mail:jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp